解説

「敗れざる者」たちを物語る人

鈴木 比佐雄

「敗れざる者」たちを物語る人

川村杳平俳人歌人論集『鬼古里の賦』に寄せて

鈴木　比佐雄

1

川村杳平さんの俳句は、人間、動植物など生あるものとの一回性の出会いを照らし出し、どこか自分を勘定に入れない精神性を感じさせてくれる。句集『羽音』を読んでいると、自分の現在を生み出した存在者たちへの感謝と畏敬の念が濃厚に湧き上がって来る。きっと川村さんは今この世に生きていることを奇跡のように感じて、日々を大切に過ごされているのではないか。川村さんは栃木県宇都宮市に生まれ育ち、東京で大学生活を送り、しばらく書店勤務を経験した後に、啄木・賢治の故郷である盛岡に憧れて移り住み、幾つかの仕事に就き現在に至っている。その間に岩手の俳句誌「草笛」に参加し、また全国的な俳句誌「沖」や「鬼」や「古志」にも参加して、多くの俳人たちとの交流を広げてきた。

川村さんとの出会いは、意外なところからやってきた。北上の詩人である斎藤彰吾さんの詩論集『真なるバルバロイの詩想』を読まれたことからコールサック社との接点が出来たのだった。川村さんは俳句創作だけでなく、数多くの俳論・歌論・エッセイなどを書き続けてきた。それらを以前から出版したいと考えられていた。私とも親しい斎藤彰吾さんからの紹介であり、またコールサック社の本作りに関心を持ってくれていた。電話で初めてお話した際には、私が俳句雑誌「沖」の創刊者である能村登四郎の教え子だと伝えるととても驚かれていた。川村さんにとって能村登四郎は、目標とする師としか言えない大切な存在だった。私にとっても能村登四郎先生は初めて出会った詩的精神を体現した本物の詩人として心に刻まれている存在であった。十七、八歳だった私は、ひたすら俳句の創作だけを考えて生きている人間が存在していることを知り驚いた。他の生徒にはただの老人にしか見えなかったかも知れないが、私には詩神（ミューズ）に取り憑かれた人間のように思われた。高校を卒業してからも退職された能村先生とは交流を持ち、教えていたカルチャーセンターまで時々訪ね、話をお聞きしたり自分の刊行した詩集を手渡したりしていた。また選者だった読売新聞の俳句欄の選評も愛読して、その批評として言葉の息遣いを学んでいた。そんな俳人能村登四郎を共有できる川村さんが出現して、何か同志が増えた思いがしたのだった。

2

川村杳平さんの第一句集『羽音』を読んでいると、読むものを自然体にさせていく、しなやかな言葉の力と人間探求の眼差しの確かさを感じた。気取らず奢らず卑屈にならず、ひたすら等身大に徹しながらも、より高き志を視線に宿している俳人だと思われた。句集は、春の章「一花」（八十五句）、夏の章「旗手」（一二〇句）、秋の章「菊師」（八十五句）、冬の章「羽音」（八十五句）から成り立っている。心に刻まれた句を各章から十句ずつ選んでみた。

〈春の章〉

画廊より春愁ひとつ持ち帰る
凱歌にも似たる羽音の熊ん蜂
履歴書の書かざるを読む雪解風
良寛の母恋ひの歌碑梅散れり
急流の息継ぐところ山桜
いつの間に楽観論者青き踏む
こころには壮年の父梅香る
夜桜を見てより仕事はかどりぬ
三陸や瓦屋根より春兆す
戦士とは敗れざる者鳥雲に

川村さんの春の句から感じられる「春愁」とは、未知への不安を抱えながらも希望を決して捨てない「敗れざる者」の不屈の精神のように思える。句集タイトルにもなった「羽音」は、熊ん蜂の羽音であると同時に、生を促し何かの達成を褒めたたえる讃歌のような思いを込めているのだろう。川村さんは父上を想起する時に梅の香が匂ってくるらしい。父母の生き方が、冬に耐えて早春の梅の香を慈しむような生活をきっと大事にされていたのだろう。戦士とは、決して「敗れざる者」なのであり、春になり北に帰る鳥たちと同じであると、川村さんはイメージ化していく。その意味で「羽音」とは、生きることの反復であり、たゆまず努力を継続する「敗れざる者」を暗示しているように私には思われた。

〈夏の章〉

能村登四郎先生永眠

花桐やしづかに偲ぶ師の一語
寂しくて犀のごと往く梅雨さなか
乾きゐる供華の花火や恐山
北上の流れとろとろ旱星
端切れ昆布海へ返して漁婦去りぬ
夏ことに寒し男に定めなし
一瞬の愛もあるべし岩つばめ
竿燈やその翌朝の広島忌
背徳の螢火ひとつ修司の詩
風涼し谷中の小径師の寺へ

能村登四郎の父は金沢出身で東京の田端で建設会社を営み関東大震災の復興で成功したが、その後は衰退していった。後を継いだ兄は商才がなく四十三歳で亡くなった。四男の登四郎は、子のいない病死した兄の代わりに全く財産のない家督だけを相続した。登四郎は商人・経営者の視点では敗れた

者であったろうが、文化的な観点では「敗れざる者」だった。登四郎の名付け親である山本安三郎という伯父は、医師であり掃雲という俳人で、曾良の『奥の細道随行日記』を発見した芭蕉研究家であり、登四郎に俳句の手ほどきをした人物であった。また父からは金沢の伝統を、母や叔母から江戸・東京の文化の精神的な価値を引き継いだのだ。そんな登四郎を偲ぶ川村さんの句を読むと「師の一語」の数々を私は想起して、師への感謝を改めて感じるのだった。川村さんは広い視野で出会った人びとや自然や事物から、その人間たちの本質を凝視していく。漁婦も寺山修司も岩つばめも含めこの世界で真剣に生きているものたちへの共感や感動が、句の言葉の流れの中に宿されて輝き始めている。最後に引用した谷中に眠る登四郎の墓へ向かう句は、川村さんの畏敬と鎮魂の思いが胸に伝わってくる。登四郎は俳句だけでなく随筆でも数多くの名文を書いている。川村さんは私と同様にそれらの随筆を高く評価していると語っていた。私は評論を書く時に、能村登四郎先生の眼光が見つめているように思う時があり、今も深い感謝を抱き続けている。

〈秋の章〉

ふところに評伝西行十三夜

銅婚の妻の剝く柿やはらかし

花芙蓉嗄れ声の父なりし

書くことは何か欠くこと子規忌なり

秋しぐれ山羊啼く賢治学舎裏

啄木の机は小さし菊日和

回想は密なるがよし黒葡萄

秋天のもつとも奥に賢治の眼

新走り鬼剣舞へ奉る

中津川

極楽のとなりが地獄鮭上る

川村さんの句の特長は、西行、啄木、賢治、修司など俳人以外の文学者の詩的精神を汲み上げて、その詩的精神と対峙しながら敬愛する者たちに肉薄していくことだ。また関東の栃木県宇都宮市生まれであるが、啄木・賢治が青春を過ごした盛岡に憧れて移住し、異邦人の眼差しを持ちながらも、盛岡の歴史文化をこよなく愛し、その価値を伝えようとしていることだ。川村さんは「啄木の小さな机」の上で「賢治の眼」に見つめられながら、生きようと決意しているのだろう。川村さんが今度の俳人歌人論集に収録された数多くの岩手をはじめとする俳人・歌人の評論を書き上げた情熱は、きっと「秋天のもつとも奥に賢治の眼」を感じて促されたからだったろう。そして盛岡で啄木や賢治の精神を引き継ぐ俳人や歌人たちによって、川村さんが育てられたことに感謝を込めてこれらの膨大な評論が書かれたのだろう。盛岡では秋になると北上川の支流の中津川にいまだ鮭が上ってくる。中津川は清流で鮎も釣れるという。そんな中津川は生と死が、極楽と地獄が、同居した場所であると川村さんは重層的に物語っている。その生あるものの真実を伝えようとする姿勢が根底に貫かれているよう

に思われる。

〈冬の章〉

娘から嫌ひと言はれ冬苺
冬青空はくれんの芽が突きささる
白鳥の羽音櫓を漕ぐ音に似し
インターネットの画像より隙間風
厳冬の一恒星となりたまふ
神の位置母が教へる子かまくら
冬晴の陽をたつぷりと奥琵琶湖

大宮氷川神社参道

寒雀あつめ異郷の民子歌碑
純愛を抛るつもりの雪つぶて

芭蕉墓再訪

義仲寺に佐渡の赤石冬あたたか

能村登四郎は母や妻子の句を数多く残した。川村さんも母や妻子のことを書いた味わい深い句を書いている。きっと川村さんは誰よりも自然体で生き、俳句を作り出したいのだろう。と同時に自然を

凝視することによって超自然的に突き抜けていくイメージが訪れてくる瞬間を待っていて冷徹に記述していく。「冬青空はくれんの芽が突きささる」などは、春を待つはくれんの芽が陽に向かって反りあがっていくさまを絶妙に表現している。それは春に憧れる北方の人びとの心を代弁しているかのようだ。また川村さんは二〇〇九年に『無告のうた　歌人・大西民子の生涯』という評伝を刊行している。盛岡を愛しながらも異郷で自らの短歌を極め、多くの後継者たちを育てた大西民子の全貌を伝えた。また盛岡の中津川の辺に民子の歌碑を造ることにも尽力したと聞いている。芭蕉は遺言で義仲寺に葬られている。川村さんは芭蕉の代表句「荒海や佐渡によこたふ天の川」の硬質で雄大な世界から、細長く小さな寺である義仲寺に置かれている佐渡の赤石が、天上で輝く赤い星のように感じられて、それが芭蕉の心のように「冬あたたか」な存在であると思われたのだろう。

以上のように川村さんは、芭蕉、子規、啄木、賢治、民子や地元の俳人・歌人などから多くの詩的・芸術精神を汲み取り、このような句を書いてきたのだろう。その延長上に今回の評論集が出現してきたのだと言える。

3

今回の『鬼古里の賦　川村杳平俳人歌人論集』は、一章「鬼古里（おにこり）の賦」、二章「『北の俳人列伝』など」、三章「『北の歌人列伝』など」、四章「対談」に編集されていて、川村さんの批評活動の全貌が収録されている。

一章の冒頭は、地元誌「岩手王国」に掲載された「神楽、その信仰とエクスタシーの系譜」から

始まっている。川村さんは稗貫川上流の岳集落を訪ねる。そこには賢治が愛した荒舞を特徴とする早池峰神楽を担う「神様の手下」たちが今も息づき活躍している。山岳修業に由来し神社の奥に安置されている権現様に奉納する六百年の伝統を持つ早池峰神楽には、五拍子の岳神楽と七拍子の大償神楽があり、「阿吽」関係であるらしい。五千年以上の縄文の歴史にも連なる神楽の伝統を生きる人びとの想いを伝えているエッセイだ。「面とればをさな顔なり里神楽」（田村了咲）などの句の引用もより臨場感を感じさせて効果的だ。

二番目の「物語の復権」で川村さんは〈俳句における「物語の復権」を図りたいと考えている。一編の長編小説を読了した時と同質の感動を、俳句作品で達成したい〉と語っている。世界最小の定型詩に長編小説の重厚さを宿らせたいと願っている。三番目の「鬼古里たより」で川村さんは、〈「鬼古里」とは盛岡近郊にある地名で、標高四三八m「オニコリ山」からとった。岩手山には鬼ヶ城という尾根もある。これは宮沢賢治の詩にも登場する。六月第二土曜の「チャグチャグ馬コ」（夏の季語）。この馬祭の蒼前神社はその麓にある。かつての馬産地岩手は「鬼の棲む里」でもあった。〉と語る。そして自らの俳句や評論を発する場所が「鬼古里」であることを再認識し、その末裔たちを発見しようと構想したのだと思われる。四番目の「賢治絶唱」は、短いエッセイだが、何度読んでも感動的だ。川村さんが賢治の教え子を訪ねて行き、賢治の死ぬ十日前にもらったハガキを読んでもらったことを記したものだ。高齢の教え子はそのハガキを折に触れて読み続けているという。そんな「尊師愛弟」を目の当たりにして、川村さんは「一読者から本当の賢治ファン」になったという。私は先日盛岡に川村さんを訪ねたが、その時に川村さんは優れた賢治研究者たちを紹介してくれた。川村さんとその研究者たちとの関係は、確かに「尊師愛弟」の関係であった。その他のエッセイも伝えるべき価値のあることを率直に語っている。例えば師と仰ぎ、故郷に骨を埋めた小説家三好京三を記した「反デラシネの志 ―― 追悼・三好京三」では、三好京三を語る多様な証言から師を浮き彫りにしていく。そしてその間に自らに語ってくれた言葉の深い意味を噛みしめるように書き記していた。

一章の後半では、川村さんが俳句の世界に入る機縁となった俳句雑誌「草笛」で書かれた俳論が数多く収録されている。「平和を愛する俳句王国いわて」には、昭和二十一年秋に、盛岡で発行された県下の若手二十六名による合同句集『山鳥』（編者は宮野小提灯）の紹介から始まり、岩手の戦後の俳句を牽引した昭和二十年代に創刊された「夏草」「自然味」「みちのく」「草笛」の成り立ちと代表作が紹介されている。また昭和五十年代に創刊された「樹氷」、岩手県俳句連盟設立、日本現代詩歌文学館開館などの現代につながることも記されていて戦後の岩手俳壇史を素描している。「五百号との対話」には、「草笛」四〇〇号を記念したエッセイで、十七年後には自分は七十歳代になっているが、団塊の世代から入会があり、入会者がピークに達しているかも知れないと予言している。ただ問題は文学愛読者が数多く存在していることが前提だという。その意味で歌人、詩人、小説家たちとの「異業種交流」を活発にして文学の土壌を広げることが必要だと提言している。

また「現代俳句渉猟」(1)～(12)は二年間「草笛」に連載された俳句評論だ。伝統的な定型詩であるので俳句世界は保守的なイメージがあったが、ある意味で詩人の世界よりも手厳しい本質的な指摘を率直に語り合うところがあるとも感じられた。俳句はある意味で日常性の中で気付かれなかった視点を発見し、世界を新たにする文学と言えるかも知れない。その発見の新鮮さを率直に語り合うという前

提があり、相互の批評の許容範囲が広いようにも思われた。

川村さんは(1)「俳句の曠野を往く」の冒頭で子規の「俳句ハ文学ノ一部ナリ。故ニ大体ニ於テハ同一ナリ」の言葉を引いている。そして句の創作や鑑賞において他の文学からの相互交流を大切にして、視野を広くして批評したいと語っている。川村さんは毎号五名以上の俳人や他の分野の表現者を取り上げている。虚子の「選も創作なり」に倣って、川村さんが取り上げた句の中から、私も俳人たちに倣ってその中の私のベスト1の句を挙げてみたい。

(1)「俳句の曠野を往く」

金子兜太・鷹羽狩行・辻美奈子・照井翠・藤村真理・林翔

光年の中の瞬の身初日燃ゆ　林　翔

(2)「俳句の虚空に遊ぶ」

田中裕明・小原啄葉・清水径子・山崎ひさを・森澄雄

なきひとにならひて坐る桃の花　田中　裕明

(3)幻想としての国民文芸

正岡子規・松尾芭蕉・川端茅舎・渡辺白泉・中村草田男・小林一茶・西東三鬼・宝井其角・酒井抱一・籾山梓月

戦争が廊下の奥に立つてゐた　渡辺　白泉

(4)「詩・歌・句」への接近

荒川洋治・松平盟子・齋藤愼爾・藤田湘子

億万年声は出さねど春の土　藤田　湘子

(5)「批評家魂」ということ

辻村麻乃・片岡秀樹・マブソン青眼・和田卓也・山口都茂女・角川春樹・石橋秀野・山本健吉（石橋貞吉）・松尾芭蕉

掛け声がグランドに咲き鼓草　和田　卓也

(6)文学としての俳句

渡辺誠一郎・照井翠・飯田龍太・戸恒東人・冨田拓也

邯鄲や祈りの都うち建つる　照井　翠

(7)「さび」の今昔

野沢凡兆・良寛・高柳重信・石塚友二・小澤實・今瀬剛一・森澄雄

炎天やこころ勇めば風が添ふ　石塚　友二

(8)佐藤鬼房展を仙台で

佐藤鬼房

蟹と老人詩は毒をもて創るべし　佐藤　鬼房

(9)私を元気にする俳句

野村万作・谷川俊太郎・大信田つとむ・岡安仁義・木内彰志・佐藤紡・田江岑子・小原啄葉・金子兜太・村越化石・齋藤愼爾・高野ムツオ・小澤實・大串章・結木桃子

月光の分厚きを着て熊眠る　　高野ムツオ

(10) 俳句は物語（ロマン）だ

太田土男・草森紳一・田捨女・松尾芭蕉・有馬ひろこ・田中裕明・照井翠・加藤楸邨・鈴木真砂女・木暮陶句郎・木附沢麦青・三ケ森青雲・今順子

窯火燃ゆ汗の一粒一粒に　　木暮陶句郎

(11) 「悪党芭蕉」の品格

松尾芭蕉・鈴木節子

佐保姫のぬくもりかこの切株は　　鈴木　節子

(12) 俳句の指針

橋本榮治・高野ムツオ・千葉皓史・岩岡中正・西村和子・鳥居真理子・柴田佐知子・徳田千鶴子・森岡正作・小澤克己・あざ蓉子・遠藤若狭男・名村早智子・妹尾健・能村研三・齋藤玄・鎌倉佐弓・植村通草・田中裕明・倉橋羊村

紙風船ついて地球を軽くせり　　小澤　克己

川村さんは、現在進行中の文学行為の動きはもちろん、社会の緊急であり切実な多様なテーマとも向き合いながら、その相互影響のただ中から新しい俳句が立ち昇ってくるのを目撃し、自らもその中に身を置きたいと考えているのだろう。川村さんが選んだ俳人の中で、私は林翔さん、小澤克己さんとは交流があった。また能村研三さんとは今も交流がある。俳人に話すと驚かれるのだが、私が在学していた市川学園高校には、一九七〇代初めに「沖」主宰の能村登四郎、同人の林翔、福永耕二が国語教師として勤務していた。高校二年の国語の教師が福永耕二、高校三年の国語は、先にも触れたが能村登四郎で担任でもあった。林翔さんとは晩年になって私の詩集や評論集などを送ったことから縁が出来て、励ましの私信を何度か頂いた。七、八年前に市川学園が近くに新校舎を作り旧校舎が取り壊されてグラウンドになり、その旧校舎跡の傍らに三人の句を刻んだ句碑が建てられた。その句碑のお披露目の式典があった。その際に林翔さんに挨拶しお話しもしたが、二人が亡くなっていることと同時に当時三人が教えた校舎が無くなり何かとても寂しそうだった。また五、六年前にも詩人で俳句の評論も書いた宗左近さんを偲ぶ会でも一緒になり、帰り道を同行しながらお話しをした日のことを昨日のように思い出した。私は三人の優れた俳人であり恩師に励まされていたことに今更ながら感謝の気持ちが溢れてきて、掛け替えのない恩師たちの冥福を祈った。川村さんも「沖」同人でもあったので、林翔さんからも良き影響を与えられたのだろう。川村さんが選んだ「光年の中の瞬の身初日燃ゆ」という句を読み、優れた俳句が存在論的な人間の存在の根源を問い、その問いそのものが言葉の芸術となり、言葉に存在が宿る瞬間に出会うようだ、と感じた。私には亡き能村登四郎と福永耕二の純粋で激しい俳句への情熱を背負って林翔さんが渾身の思いで作られた句だと思われた。川村さんはベテランから新人まで先入観なしに優れた斬新な試みを紹介している。その俳句を愛する思いが批評行為の中に底流となって貫かれていることが「現代俳句渉猟」を読めば明らかだと思われる。

4

第二章の「『北の俳人列伝』など」は、東北に縁のある芭蕉も含めた二十名もの俳人の一人一人の俳句に賭ける情熱を川村さんは、俳人の生きた場所に踏み込んで、その周辺の相互に影響を与え合った俳人との交流も含めて深く論じている。その何名か評論の一部を紹介してみたい。

山崎和賀流は、沢内盆地の湯田町に暮らし三十四歳で角川俳句賞を受賞するが、翌年の一九七四年に急死した。菓子職人の傍ら句稿ノートに三千句以上が残されていたが、句集は遺句集が一冊刊行されただけだ。二句を引用する。

座敷わらし加へて雪のかごめ唄
めくらぶんど村の男に一揆の血

田村了咲は、盛岡市に生まれ盛岡工業学校を卒業し陸軍航空部所沢支部に勤務し満州にも派遣されたが、戦後は岩手大学図書館司書となった。戦前戦後を通して虚子の「ホトトギス」、水原秋櫻子「馬酔木」、宮野小提灯・山口青邨の「夏草」などで活躍を続け、「草原句会」を長年継続し岩手俳壇をリードした俳人だった。一九八〇年に七十二歳で亡くなった。二句を引用する。

面とればをさな顔なり里神楽
銅鑼鳴れば鬼面獣面踊り出づ

山口青邨は、一八九二年に盛岡市で生まれて、五歳で母を亡くし叔父夫婦に育てられた。東京帝国大学助教授時代に高浜虚子に師事し、水原秋櫻子らの東大俳句会に参加し、「ホトトギス」「夏草」などで亡くなる九十六歳まで活躍し続けた。

われ生れ母みまかれる五月かな
人それぞれ書を讀んでいる良夜かな

その他に「極楽俳句」の高浜虚子・富安風生・遠藤梧逸の系譜の解説、昭和十五年の「京大俳句」弾圧事件で検挙された「新興俳句」の平畑静塔、「草笛」同人であり詩人村上昭夫夫人で純愛と郷土愛を詠った昆ふさ子、俳誌「河」主宰で「荒ぶる神」のように『信長の首』を書いた角川春樹、「草笛」同人で句集『鬼古里』で眼光鋭く故郷の暮らしの現実を見詰める「哄笑俳句」の小菅白藤、加藤楸邨から高く評価され「寒雷」同人であり「俳句的精神の貴族的ダンディズムを手中に収めた」宮慶一郎、「自然味」や「濱」にも関わり「青嶺」を主宰し古里を浄土のように見据える眼を持つ木附沢麦青、俳誌「樹氷」を主宰し「風狂の境地」を句作している小原啄葉、「沖」同人で能村登四郎から〈「軽み」ではない「重くれ」俳句〉と高く評価された工藤節朗、「濱」に所属し主宰する大野林火に影響を受け「翳りのある余情」の系譜の太田土男、秋元不死男主宰の「氷海」に所属し影響を受け「新しい俳句」に挑戦してきた堀米秋良たちを、川村さんは周辺の俳人の証言を交えて多面的に論じ、その俳人たちの生涯の試みを浮き彫りにしていく。それゆえ作者の生涯が回想されて、作者の生きる姿勢が感動的に伝わってくるのだ。

第三章「『北の歌人列伝』など」は、川村さんの文学精神に大きな影響を与えた西行への畏敬の

エッセイを想起させる。また母上が短歌を作っていることに刺激されて、自らも盛岡の短歌文芸誌「北宴」で短歌を愛読しているこだわりも語っている。また瀧本慶子、柏崎驍二、小笠原和幸、田江岑子の歌人論も俳句に負けないほど鋭く歌人達に迫っている。

アララギ派歌人五味保義に影響を受け、中国人花嫁に日本語を教えていた瀧本慶子について「著者の孤影は夕陽の暖かさをまとっている」と大切に語っている。「やはらかき心になりて窓に寄る日すがら庭に鳥の来る日は」などの歌には、その暖かさが良く出ている。

宮柊二主宰の歌誌「コスモス」に属する柏崎驍二について、「浄い歌を思い、明るい団欒を大切にし、静かに《みづからの生を証明してゆく》」なつかしい歌人だと告げている。「拓(ひら)きゆく時間のうえに刻まるる大小の創(きず)、創はわが生」などの歌には、自らの生を直視する誠実さを感じさせてくれる。

短歌結社に所属しない小笠原和幸について、「時代や個人に内在する悪意や不条理を短歌という器に造型し、慄然たる情景の一断面として提示する、酷薄な永劫回帰の詩精神」とその異端の個性を評価する。「ひとたびは真白き喉を掻つ切つてみたかつたらう鎌も蒼古と」などの歌は、人間が侵してみたくなる深層の慄然たる情景を幻視している。

短歌誌「未来」と「北宴」に属する田江岑子について、「無限のかなしみを抱き恋の絶対野に立ち尽くしている」歌人であるといい「国宝級の歌の刀匠なのだ」ともいって高く評価している。「逢へざれば棘みつる胸にまぼろしを蒼く透くまでいだきてねむる」などの歌は、「恋の絶対野」という言葉に拮抗する恋情を感じさせてくれる。

第四章の川村さんと「樹氷」主宰の白濱一羊さんの対談は、現役の俳句実作者が自然体で俳句の魅力を語り合っていて、俳句を志す人びとにはとても良い手引きとなるだろう。

私は日ごろ多くの詩人の詩篇を読んでいるが、今回は川村さんのお蔭で膨大な俳句と短歌の作品を読みとても刺激を受けた。表現形式を超えて川村さんが提起するように文学精神という観点からすれば、俳句、短歌、川柳、詩、小説などは、重なるところが大きい。川村さんの俳人歌人論集は、俳句、短歌を志している方はもちろんだが、詩、小説に関わる多くの人たちにも、小さな蛸壺のようなジャンルを超えて、たえず豊かな文学精神に立ち返ろうと考えている人びとにも大きな刺激になるだろう。

最後にこの解説文のために盛岡に出向いた時のことを記した私の詩を引用させて頂く。この詩は川村さんが大西民子歌碑など盛岡の様々な場所に案内してくれなかったら書くことはできなかったろう。川村さんを始め、啄木・賢治たち盛岡の文学者・芸術家たちを生んだ盛岡という場所の目に見えない力によって書かされた思いがした。

盛岡・中津川のほとりで　　鈴木　比佐雄

盛岡駅近くの開運橋から北上川を眺めると
この街の主役が北上川であると感じた
悠久の大河はこの街の時間を遙かに呑みこんでいる
太平洋の石巻湾河口から二〇〇㎞のこの辺りでは
満々と水を湛えて静かに流れ続けている

盛岡市を貫く北上川には支流の中津川と雫石川が流れ込んでいる
鈴木さん　大西民子の歌碑が中津川のほとりにあり
水辺には　鈴木さんの好きな野草も咲いています
この川では一年中、釣り人が鮎釣りなどを楽しめます
数週間後には中津川には鮭が上ってきて産卵を始めるでしょう
民子の評伝を書いた俳人の川村杳平さんが歌碑に案内してくれた

きららかについばむ鳥の去りしあと
長くかかりて水はしづまる　　大西民子

短歌を読みながら背後に水の流れや水音を感じることができた
民子の短歌はどこか謎を秘めている
鳥がついばんでいるのは木の実か花か、鮭か鮎だろうか
何か単なる自然詠ではないものを感じた
たとえば「鳥」とは去っていった恋人だろうか
そうすると「水」とは「民子の心」であったろうか

清流にしか咲かないミゾソバの花々と水流を眺めていると

鮭たちたちが今ごろ北上川のどこかで
力を振り絞ってこの中津川を目指していると思われた
鮭たちは太平洋に回遊しながら3．11に遭遇しただろう
きっと海にさらわれた人間たちの悲劇を目撃しながら
北上川にようやく辿り着き中津川を目指したのだろう
いつの日か津波にさらわれた人びとの魂が
生まれ故郷や家族のもとに戻ってほしいと祈った
民子の歌碑の少し下流に「深沢紅子　野の花美術館」があった
紅子の野草の絵には、野草を描く喜びに満ちていた
野草を一つの人格として美しい他者として描いていた
紅子の人物画の女性たちの表情には、恥じらいがあった
少女・少年の一時期しか存在し得ない恥じらいを
紅子は生涯のテーマとしたのかも知れない
啄木、賢治、紅子、民子が愛した街は
川と野草と魚たちに愛されている